

研究の経過と概要

I 研究テーマ

すべての子どもたちへの心理的、教育的援助のあり方

II 経過

現代の子どもたちを取り巻く環境には、地域での交わりの過疎化、核家族化や子どもの数の減少、携帯電話・スマホとのかかわり等、様々な問題がある。友達と遊ぶといっても、同じ空間にはいるが一人ひとりがゲームや漫画に興じ、ひとり遊びとなんら変わらないという状況の中では、人間関係、友人作りも容易ではない。また、携帯メールやLINEなどを使い、友だちとつながっていないと不安を感じる子どもも増えている。さらに、本来であれば成長の過程で、自然に社会性を身につけ、人とかかわりながら成長していくものであるが、それができないために、学校が居心地よく楽しい場所でなくなってしまっている子どもたちも少なくない。

このような現代社会に生きる子どもたち全てを援助しようとする枠組みが今注目されている。その枠組みでは、子どもに対する援助を、不登校、いじめなどの問題で分類するのではなく、子どもが求める援助の程度に応じて、次のように3段階に整理している。

一次的援助…「すべての子ども」への援助

日頃の教育活動、開発的・予防的な活動

二次的援助…配慮を要する「一部の子ども」への援助

子どもの苦戦が大きくなり、子どもの発達を妨害することを予防することをめざす

三次的援助…特別に個別の援助を必要とする「特定の子ども」への援助

一次的・二次的援助も含まれた総合的な援助

(「石隈・田村式援助シートによるチーム援助」図書文化より)

そして、本部会ではここ数年、一次的援助についての研究を進めている。それは、すべての子どもたちが対象の予防的援助に力を入れることが、問題の顕在化を防ぐことにつながると考えたからである。問題が起きる前から、学校集団作りや個々の子どものコミュニケーション能力の発達のために機会を設け、意図的に自分作りをうながす取り組みや、人間関係の力を身につける取り組みをしていく必要がある。その方策として、エンカウンター、アサーション、ソーシャルスキルトレーニングなどを日常的な指導に取り入れてみようと研究を進めてきた。そして、これらを用い、それぞれの発達段階に応じた学級指導などの実践を発表し合い、検証に努めている。さらに河村茂雄先生が開発したQ-Uアンケートについても学び、Q-Uアンケートをいかした「すべての子供たちへの援助のあり方」についても探っている。

III 研究の具体的内容と方法

1 エンカウンターを取り入れた集団作りについての実践発表

2 学習会

(1) 「生活指導」「ガイダンス」から考える本部会の研究の方向性

(2) 与論島「島立ち」から、子どもたちとのかかわり方を考える

3 授業研究

(1) 加藤先生 (山梨南中)

学級活動指導案

授業者 加藤 紀子

1 活動内容 合唱コンクールダイヤモンドランキングを作ろう

2 日 時 平成 25 年 8 月 30 日 (金)

3 場 所 山梨市立山梨南中学校 1 年 4 組教室

4 本時のねらい

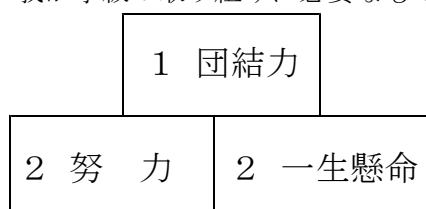
・自分が学級や学校の一員であることに自覚を持ち、互いに協力し合って集団を向上させていこうとする意欲を高める。

5 本時の授業

	学習活動	指導上の留意点	資料など
導入	①ウォーミングアップで緊張をほぐす。 「ピンポンパンゲーム」 班の誰かを指さしながら「ピン」→指された人が別の人を指さして「ポン」→指された人が誰かを指しながら「パン」→「パン」と言った人の両側の人が「イエーイ」と言う。 「ピン・ポン・パン・イエーイ」を 「友・輝・祭・オー」に変えてやってみる。	①班で行う。(体の向きを変えて、班の形にする)	
10			
展開	②合唱コンクールに取り組むのに大切なことは何かを考える。 「合唱コンクールを成功させるために、このクラスに必要なことは何かを考えてみましょう。」 ③学習シートの質問 1 について考える。 「合唱コンクールで大切だと思うことをランキングしてください。」 ④質問 2 について考え、意見を交流する。 「『とても大切である』と考えた理由は何かでしょうか。」 「『あまり大切でない』と考えた理由は何かでしょうか。」	②数人の生徒に、簡単に答えさせることで考えやすくする。 ③学習シートを配る。 ・ A ~ J の項目の中から選択させる。 ・ 学習シートの裏に付箋を 2 枚貼っておく。 ④学習シートに理由を記入させる。 ・ 2 種類の付箋に名前を書き 「とても大切である」→黄色の付箋 「あまり大切でない」→青色の付箋 を黒板に貼り、意思表示をさせる。	学習シート 付箋 掲示用カード

30	<p>⑤班に分かれて話し合いをし、ダイヤモンドランキングの表を完成させ、黒板に貼る。 「班の中で話し合い、代表者は完成した紙を前に貼りに来てください。」</p> <p>⑥各班の発表を聞いて、クラスに必要なものを3つ決定する。 「どの様な話し合いをして、この結果となったのか、各班で発表してください。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・10項目について、フラッシュカードを用意し、黒板に掲示する。 ・様々な意見に対して、否定しないようにする。 <p>⑤各班に台紙と印刷された色画用紙(10枚)を配り、ランキング表を完成させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班長が議長となり、話し合い活動を進めるようにする。 <p>⑥なぜ、このような結果になったかを発表させ、様々な考え方や価値観があることを理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表を聞き、3つの必要なものを決定し、生徒に確認をする。 ・結果を見て、教師の感想と思いや願いを話す。 	<p>ランキン グ台紙 ランキン グ項目</p>
ま と め 5	⑦学習シートに感想を書く。	⑦合唱コンクールの取り組みで、自分が頑張りたいことを書かせるようにする。	合唱曲を BGMに する

⑥で決定した、「我が学級の取り組みに必要なもの」。



<生徒の感想より>

- ・わたしは「努力」を選んだけれど、やっぱり「団結力」がいいと思う。自分たちの努力が、団 結につながると思う。
- ・今日の学活では、一人ひとりが意見を持っていいんだ、ということを学んだ。
- ・学園祭に向けて、がんばろうという気持ちが大きくなったし、みんなが自分の考えを言えて、いい話し合いができた。
- ・意見を聞き合って、「そういう考え方もあるんだなあ」と思った。
- ・「団結は大切だ」と言っているだけではなく、実際にクラスで団結をして、最高の合唱にした い。
- ・この授業を通して、少しみんなの心が一つになったような気がした。

<資料　　ダイヤモンドランキング表>

質問1　合唱コンクールで大切だと思うことをランキングしてください。

①		
②		②
③	③	③
④		④
⑤		
⑥		

- A 練習量：どのくらい練習したか
- B 団結力：みんなの心が一つになったか
- C 責任感：自分のすべきことができたか
- D 思い出：思い出に残る取り組みができたか
- E 努力：できる限りの活動ができたか
- F 一生懸命：精一杯がんばったか
- G 学級の結果：よい成績を残せたか
- H 感動：感動することができたか
- I 個人の結果：自分の技術があがったか
- J 友情：友達との友情が深まったか

質問2

- ・「とても大切である」と考えた理由はなんですか。

- ・「あまり大切でない」と考えた理由はなんですか。

学園祭を終えて・・・

学園祭終了後、「ダイヤモンドランキングを作ろう」の授業を振り返る時間を持った。合唱も、体育の部も、何も賞をもらうことはできなかったが、「団結すること」について、学んだようだ。

<生徒の言葉より>

- ・団結するためには、みんなの協力が必要。一部の人だけが頑張ってもだめだ。
- ・全体のことを考えて、自分のことではなく、全体を優先させて活動することが大切。
- ・練習で出来ないことは、本番でも出来ない。練習の場面から、みんなと協力しないとだめだ。
- ・団結すれば、仲間とどんなことでも乗り越えられると思う。
- ・自分勝手なことをせず、みんなに自分が合わせるようにすることが大切だとわかった。
- ・団結力をもつことは、みんなのためにも、自分のためにもなる。
- ・お互いに注意し合える関係が、本当の仲間だと思った。

(2) 岩森真由美先生 (井尻小)

(1) 集団づくりの構想

そのために、

(2) 経過

まず、「Q-U」アンケートで学級の状況把握・分析。「Q-U」により、教師の日常観察や面談による児童理解の限界が補われ、「学級内の一人一人の状態」、「学級集団の状態像」、「学級集団の状態と個々の児童の関わり」等をよりの確に把握することができた。その結果を生かし、子ども一人一人への支援や声掛けの方法を工夫し、集団や個へのアプローチの方針を立てた。

次に、一年間の行事への取組を見通し、どの取組でどんな活動ができ、どんな力が付けられるかを整理した。

そして、取組が終わるごとに、ふりかえりカード『あしあと』に感想や気づきを記録させていった。そこでは、自己評価から得られる「自尊感情」を大切にし、自己評価に対する教師の評価（賞賛・ねぎらい・成長の様子 等）を書き添えて、一人一人に伝えるようにした。そのことを通して、「自分たちへの評価」（学級集団への評価）ができる視点を育くむようにしていった。

また、友だちから認められることから生まれる「自己有用感」の方を、自分で自分を認めることよりも大切にとらえるようにした。他者からの肯定的な評価を受け入れることが、居場所づくり、絆づくりのために必要だと考えたからである。

更に、行事の取組とは別に、構成的グループエンカウンターを取り入れた人間関係づくりを試みた。年間を通して、随時、短時間で行なった。

2月には、道徳の時間に、エンカウンターを取り入れた授業に取り組んだ。自分では気づかなかった自分の良さを、友達が気付いてくれた。その嬉しさが自信につながれたことが振りかえりから読み取れた。

(3) 授業研究 (道徳)

①主題名 大切な友だち Part 2 2-(2) 2-(3)

②ねらいとする価値

2-(2)「だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。」

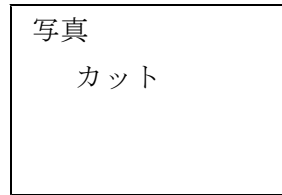
2-(3)「互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合う。」

人々の生活は、相互理解と信頼のもとに成り立っている。子どもたちの学校生活も豊かな人間関係が築かれていればこそ、のびのびと自己実現しながら、成長していくことができる。そして、豊かな人間関係を支えるのは、「思いやりの心」である。心は目に見えないので、日頃からの人間関係づくりはとても大切である。

本学習を通じて、互いのよさを認め合うことにより、励ましあい、友だちを大切にする態度を育みたい。

③取り入れたエンカウンター

- 魔法のブリッジ →
- チラシでパズル
- 団結の塔
- ～さんの☆いくつ



④ 成果と課題

東京旅行をスタートに、総合での取組、運動会、公開研究会、音楽発表会、秋の校外学習、スキー教室（宿泊）等に取り組み、『あしあと』に振り返りを記述し、互いに読み合っ、頑張りや成長を認め合ってきた。子どもたちは、階段を上るように成長していった。

学年のスタート当初には、自分の言動が及ぼす影響を考えず、乱暴な言葉づかいや暴力で友達を傷つける場面も見られ、力づくや早い者勝ちで主張を通そうとする傾向も強かった。行事を一つずつ丁寧にやり遂げながら、自分を認め、友達を認め、友達に認められるという経験を積み重ねていった。そして、協力し合うとはどういうことかというイメージが、一人一人の心の中に少しずつ形成されていったように思う。

本授業は、5年生もまとめの時期に入ってからのものである。子どもたちが、自分たちのクラスを見つめなおすいい機会になった。振り返りカードの1学期初めの方の記述には、「自分はこう感じた」というものが多く、友だちを褒める場合も「わたしに〇〇してくれたからよかった」という幼い記述が多々あった。しかし、3学期になると、全体を俯瞰して見通す視点が育ち、自分たちの判断で行動できる自信や、それゆえの楽しさややりがいを感じていること、また、集団への帰属意識が育まれていることが、はっきりと読み取れるものと変化していた。来年は6年生になって最高学年としてより良い学校づくりをがんばりたいという思いを記した子どももかなりいた。どの子も、自分への自信、自分の所属する集団（学級・学年・学校）への満足感や最高学年への希望や意欲をもって、5年生を終えようとしていることが感じられた。

IV 成果と課題

エンカウンターを取り入れた学級作りの実践発表、研究を通し、通常のかかわりの中ではなくなかなかコミュニケーション能力を身に着けることができない子どもたちの様子が確認された。子どもたちは人間関係について非常に気を遣い、衝突することや周りから浮くことを避けている。ありのままの自分を出すことはせず、それぞれの場面に応じていろいろな仮面をかぶっているようである。エンカウンターは仮想ゲームの要素があり、仮面をかぶったままで人間関係のトレーニングをすることができる。教師は其中で本音が見えたときを見逃さないようにすることが必要である。

また、社会が変化、子どもが変化している中、学校が果たすべき役割について改めて考えさせられた。社会においてはさまざまなマニュアルが利用されているが、学級作りはマニュアル化すればよいというものではない。子どもや学級の実態、発達段階に応じて創意工夫していくことが大切である。

さらに、年々、学校に求められることは増えており、じっくり落ち着いて取り組む時間がと

りにくくなっている現状がある。しかし、その中で子どもにつけたい力、目標を設定し、適切な支援を行いながらも子ども自身が学ぶようにしていきたい。保護者との連携も大切であり、共に子どもたちの自立を促すような共通意識をもつことの大切さも確認された。

山梨南中1学年の研究授業は、新学期が始まって2日目に行われた。エンカウンターを取り入れ、しばらく離れていた学級の仲間との距離を近づけ、初めての学園祭に向けての意欲を作っていくものであった。夏休み明け2日目にもかかわらず、生徒たちは課題に意欲的に取り組み、仲間の意見を受け入れ、これから学園祭に向けて取り組んでいこうとする意欲が感じられた。学園祭の取り組みに必要な要素を、色分けされたカードを使った作業を取り入れながら考えていった。目に見える具体的な学習活動を工夫したことはわかりやすく、当日の生徒の実態に即したものであった。どのグループからも真っ先に挙げられたのは、学級目標もなっている「団結」という要素であった。この後、「団結」とは何か、具体的な行動として考えていくとよいであろう。

そして、学園祭後に、もう一度今回の授業を振り返ることにより、「団結」を次の行事、機会につなげていくとよいであろう。行事の精選の必要性が話題となって久しいが、行事を通して得るものは大きい。ひとつの行事は単発のものではなく、中学3年間を見通す中で、子どもたちをどう変容、成長させていくかを考え指導をしていくものである。1年生は中学校生活の土台を作る大切な時期である。3年生となったときの修学旅行、学園祭、卒業式につなげるように、それぞれの段階で必要な力をつけていくことが大切である。

また、生き生きと元気に授業に取り組む生徒たちに感心させられる反面、子どもたちの幼さも気になった。それは他の中学校に限らず、小学校でも感じていることであった。反抗期を上手に乗り越え、それぞれの場面で必要な厳しさを学び、成長させていくことがこれからの課題のひとつであろう。

V 報告書作成参加者

奥野田小校長	丸山久美	牧丘第三小校長	今泉教秋		
山梨南中教諭	加藤紀子	山梨南中教諭	筒井修子	塩山南小教諭	堀内美紀
井尻小教諭	岩森真由美	塩山中教諭	根岸喜久恵	塩山中教諭	佐久間潤

